

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

突発短編 艦これ

【作者名】

案山子屋

【あらすじ】

長く苦しい戦いを終え母港に帰港した私達を出迎えたのは、味方だったはずの艦娘達からの攻撃だった……

突発短編 艦これ

私達は長い間深海棲艦と戦い続け、多くの犠牲を払いながらも母港へ帰還した。

母港には多くの艦娘達が待っていて、最初は歓迎してくれるのかと思っただけ……まあ、ある意味間違いではなかった。

帰港した私達を歓迎したのは、イナゴの群れのように飛んでくる砲弾。蜘蛛の糸のような、芸術的で濃密な軌道を描いて襲い掛かる魚雷。太陽を隠すほどの航空機。連戦に次ぐ連戦で、疲弊し、ようやく母港に帰れると思って安心しきっていた私達は、驚愕の中で砲火の嵐に飲み込まれ、轟沈した。辛うじて生き残れたのは私だけ。痛みと流れ出る血に涙を流し。歯を食いしばりつつ、追撃を振り切った。いや、もう放っておいても轟沈すると思われたから、見逃されたのかも知れない。それもそうだ。もう私は脅威ではない。武装を全て失い、燃料はもはや残っておらず、機関部もすでに熱の限界を超え、体を焼き始めている。私が轟沈するのも時間の問題だろう。

「一体、どうして……何故!!」

海面に膝をつき、怒りと屈辱、悲しみ、色々な感情がごちゃごちゃになった状態で、全力で海を叩く。母なる海、と呼ばれるだけあり、海はその圧倒的な包容力を持って私の感情を飲み込む。塩辛い涙が溢れだし、さらに味の濃い海に溶け込む。

しばらく泣いた。わけがわからないほどに泣いた。ワタシハ、私達はあんなに頑張ったのに。私達はあんなに沢山の『敵』を倒してきたのに、どうしてあんな仕打ちを受けなければならないのかと。理不尽さに泣いた。

そして、涙がようやく止まった頃。丁度海面に映った『敵』の姿を

見て慌てて振り向く。しかし誰も居ない。

まさか、と思い再び海面を覗き込む……

「わた……し？」

肌は死人のように青白くなり、目は海のように青く。提督に褒めてもらったことを誇りにしていた髪は真っ白に。一目見ただけではそうとわからないけれど、『ソレ』は間違いなく『私』だった。

一瞬思考が黒く焼き切れた。

「うわあああああつああ!!!」

何も無い海を中心。光すら飲み込む、私の心より真っ黒な海。その中心で叫ぶ。ひたすら叫ぶ。

涙が止まらず、鼻水だつて出る。それでも叫ぶ。

もう帰れない。あんなに好きだった提督にも、もう会えない。もう話せない。あんなに私を慕ってくれていた駆逐艦達にも。世話を焼いてくれた空母達にも。皆に会えない。

嫌だ。そんなのは、嫌だ。こんな現実には狂ってる。だけど、認めるしか無い。

ワタシハ、シンカイセイカンニナツテイタ